

---

---

# 相談援助演習における小地域福祉活動実践事例を 活用したコミュニティソーシャルワーク演習方法の研究

浜野 智之

---

## 要旨 (Abstract)

本研究は、四年制大学の社会福祉士養成課程における相談援助演習での地域福祉力形成を目的とした演習プログラム開発について紹介し、その学習効果を検証したものである。開発した演習プログラムは、地域福祉力形成に焦点化するためコミュニティソーシャルワークを基盤としており、小地域福祉活動団体へのフィールドワークを含めた「社会資源開発」をテーマとしている。この2日間7コマ630分をかけて行う演習プログラムを3年度計約55人の学生を対象に実施し、受講生が自由記述で記入した1日ごとの受講コメントの記述内容を分析して考察を行った。結果、受講生たちが①小地域福祉活動で行われている情緒的サポートを中心としたインフォーマルなサポートの実態を知り、②クライアントを地域の適切な社会資源につなげながら、社会資源がないときは創り出していく社会福祉士の役割に気づき、③地域福祉における社会資源開発をする際の方法について理解を深めたという学習効果が明らかになった。

キーワード (Keyword) 社会福祉士 相談援助演習 地域福祉 コミュニティ  
ソーシャルワーク アクティブラーニング

## I. はじめに (Introduction)

2007(平成19)年12月5日に「社会福祉士及び介護福祉士法改正法等の一部を改正する法律(平成19年法律第125号)」が公布し、より実践力の高い社会福祉士を養成することを趣旨として、実習・演習科目においては、従来の「社会福祉援助技術演習」が「相談援助演習」となり、時間数も120時間から30時間増加して150時間となり、教育内容の充実を志向したカリキュラム編成が行われた。

これは近年、社会福祉に関するサービス内容や提供形態が「自立」「利用者本位」「地域福祉」などをキーワードに変わってきたという社会状況を受けて、社会福祉士としての職業倫理に基づいた価値や判断力をもって現場で実践できる知識と技術を身に付けられる学習内容が求められるようになったという現れである。

大学をはじめとする各社会福祉士養成施設は、社会に要請される社会福祉士の養成に向けて様々な実践に取り組んできたところであるが、改めて平成28年6月に上野谷は、「地域福祉の学びをデザインする」必要性を「日本の超少子化・高齢社会、人口減社会、中山間地と都市問題、ひきこもりや虐待等対応の困難な事例の増大、いわゆる制度の狭間で生じている地域生活困難な状況を、待ったなしの危機的状況ととらえ、主体的に学ぶ生活者として、学生や専門職を位置づけ、彼らに地域福祉力形成を焦点化して学んでほしいと願った。」としている（上野谷2016：ii）。

一人の生活者の地域での自立生活を支えるためには、フォーマルとインフォーマルの両方の社会資源を活用したサポートの構築が想定されているが、この両者の関係性は表裏一体のものであり、その理解なくしては実践場面での活用は難しいと言わざるを得ない。

相談援助演習はその理解を深めるための機能や役割を持っているが、地域支援を行うための相談援助技術であるコミュニティワークの演習においては人物や団体などの社会資源、歴史、課題とその背景など地域特性における変数の多さから「たら・れば」ばかりに陥りやすい特有の難しさがあることが課題となってきた。

また、誰もが地域の中で生きがいを持って暮らせる地域共生社会を目指すため、地域包括ケアシステムの構築をはじめとする地域の生活者を中心に置いた社会資源の整備や開発の動きが活発になってきている。経済財政運営と改革の基本方針2016(骨太の方針2016)の中でも「全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り高め合う地域共生社会を実現する」ことを目指し、福祉サービスを必要とする人も含めて「あらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉などの公的サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる仕組みを構築する」ことが掲げられている（内閣府経済財政諮問会議2016）。

そこで注目されているのが人々の生活・人生の再建とともに地域の再建・成長を目指す実践であるコミュニティソーシャルワーク機能を高める実践である。大橋によると、コミュニティソーシャルワークにはニーズキャッチ機能に始まり、個別支援・家族全体への支援機能、ICFの視点を踏まえたケアマネジメントを手段とした自己実現型ケア方針の立案機能、インフォーマルケアの開発とその組織化機能など、12の機能があるとされている（大橋2015：27-37）。

その機能を展開できるシステムづくりは現在進行中であり、その担い手としてコミュニティソーシャルワーカーや地域福祉コーディネーターという名称でコミュニティソーシャルワーク機能を発揮することに特化した専門職を設置している市区町村や社会福祉協議会、福祉施設も散見される。彼らがそれぞれのフィールドでコミュニティソーシャルワークを実践することで、関与した地域において年齢、性別、志向、障害の有無など多様な人たちの地域生活を支え、包み込むコミュニティが育っていくことが期待されている。

相談援助演習が文字通り「ソーシャルワーク実践のための訓練の場」であるならば、コミュニティソーシャルワーク機能を高めるための新たなプログラム開発が求められる時期が来ていることが予見される。福山は、「演習は技術や概念について、知的作

業を含めた一連の体験をとおして熟得するためのものであることを理解し、また、「理論、方法、技術、価値の諸体系と実践体系との交互連鎖現象を実証する作業である」と定義づけている（福山2009：75）。

演習が観察、理解、分析、応用、理論化などのどの段階の能力養成をも可能にするものであることを踏まえ、本研究では、四年制大学の社会福祉士養成課程の学生を対象に地域福祉力形成を目的に実際の小地域福祉活動実践事例を組み込んだ演習プログラムを開発しその学習効果を検証することとした。

## II. 研究方法

### 1 研修方法と対象

本研究は、社会福祉士養成を行っている四年制大学において2年次の集中講義期間に配当となっている「相談援助演習Ⅴ」という科目の全15コマのうち、2日目から3日目の2日間連続7コマを用いて実施するプログラムを作成した。内容は実際の小地域福祉活動現場へのフィールドワークと教室でのグループワークを用いての「社会資源開発」の演習である。

次に筆者である教員が平成25年度から平成27年度の3年度に1クラス17～19人の学生を対象にその演習プログラムを実施した。実施期間はそれぞれ平成25年12月19日と20日、平成26年12月18日と19日、平成27年8月19日と20日である。

各日の受講後に自由記述・記名形式の受講コメント用紙をクラスの全学生に配布し、記述内容の分析結果をもとに実施プログラムのねらいがどのように学生たちに影響を与えたかということについて考察する。

演習クラスは、履修希望者が3クラスに分けられたもので、1クラスは平均17～20人で編成されている。受講生のほとんどは「相談援助の理論と方法Ⅰ」という講義科目を履修しており、社会福祉士の倫理綱領や国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワークの定義について学習済みである。「地域福祉の理論と方法」については履修中の段階だが、平成25年度および平成26年度の受講生はすべてのカリキュラムを終了して単位認定の可否を待っている段階であり、平成27年度の受講生は後期履修が残っておりカリキュラムの途中の段階である。

「相談援助実習」という現場実習については、次年度以降に控えている段階である。

### 2 演習プログラムの作成

本研究で作成したのは、前述のように実際の小地域福祉活動現場へのフィールドワークと教室でのグループワークを用いての「社会資源開発」の演習であり、2日間かけて90分一コマを7コマ連続で進めており、構成は次のようになる。

表1 「社会資源開発」演習の構成

日数	内容
2日目	(1) コミュニティソーシャルワークが必要とされる背景 コミュニティソーシャルワークの機能と担い手 (2) フィールドワークとサービス開発演習の準備—前半— (3) フィールドワークとサービス開発演習の準備—後半— (4) フィールドワーク—前半— (5) フィールドワーク—後半—
3日目	(6) サービス開発演習—前半— (7) サービス開発演習—後半—

なお、フィールドワークは同じ市区町村の中の異なる地域で活動する2団体の受入協力を得て行ったが、平成27年度は演習を実施した時期に都合が合わず、1団体のみで2回に分けて実施している。

この演習プログラムの目標は次の3つである。

①インフォーマルなサポートの実態を知ること

地域での自立生活にはフォーマル、インフォーマルの社会資源によるサポートがどちらも不可欠なことに気づき、実際の小地域福祉活動の中でインフォーマルなサポートがどのように行われているかを知ること。

②コミュニティソーシャルワークを行う上での社会福祉士の役割を理解すること

社会福祉士は、社会資源との関係を調整することでクライアントの自立生活支援を行うが、その時にまだ存在していない社会資源については新たに創り出す、または既存の社会資源の変化を促すなど、自ら働きかけて社会資源開発をしていく役割があることを理解すること。

③地域福祉における社会資源開発の方法を知ること

地域の社会資源開発には様々な方法が考えられるが、コミュニティワークの手法を基盤としながら、グループで対象とする地域について情報収集し、対象者のニーズを捉え、地域アセスメントで持っている社会資源を持ち寄り整理して、地域住民や関係者と共に地域プランニングをしていくという一連の方法を知ること。

なお、本演習プログラムに用いる資料を含め、「相談援助演習V」の3日間15コマの資料は、特に指定がない限り筆者の自主制作テキストとして1日目の開始時にすでに配布済みである。

【2日目】

(1) コミュニティソーシャルワークが必要とされる背景、コミュニティソーシャルワークの機能と担い手

演習プログラム全体の導入として、地域での自立生活を支える上で用いられるコミュニティソーシャルワークについて、必要とされる背景、その機能、担い手を中心に説明する。

進行①挨拶、出席確認、アイスブレイク、グループ分け、演習の流れについて説明 (30分)

グループワークやフィールドワークを円滑に進めるため、受講生17～

19人を4グループに分ける。

進行②コミュニティソーシャルワークが必要とされる背景について説明（15分）

ケースワークの限界とコミュニティワークの限界について触れながら、地域での自立生活を支える上でのコミュニティソーシャルワークについて説明する。

進行③コミュニティソーシャルワークの機能について説明（15分）

事例を用いながら、「個別支援・家族全体への支援機能」、「インフォーマルケアの開発とその組織化機能」、「個別支援に必要なソーシャルサポートネットワークの組織化と支援ネットワークのコーディネート機能」などの本演習プログラムと関わりの深い機能について説明する。

進行④コミュニティソーシャルワークの担い手（15分）

社会福祉協議会や地域包括支援センターなどの相談支援機関が中心となりながらも、子ども家庭支援センターや地域活動支援センターといったその他の地域の相談支援機関、特別養護老人ホームや保育園などの施設も担い手になっている現状を伝え、担い手の幅の広さを中心に伝える。

(2) フィールドワークとサービス開発演習の準備—前半—

進行⑤出席確認、前回の振り返り（10分）

進行⑥コミュニティワークのプロセスについて説明（15分）

進行⑦フィールドワーク先の事前情報確認（20分）

初日配布済みの資料 A、B、C を用いながら、それぞれのフィールドワーク先の小地域福祉活動団体（筆者の演習ではサロン活動を行う団体を対象とした）やその団体が活動している地域についての事前情報を確認する。また、その中で施設名など受講生の分からない用語があれば解説する。

進行⑧フィールドワーク先の決定（5分）

フィールドワーク先の受入許容人数の都合から、A と B それぞれ2グループずつどちらに行くかを定める。

進行⑨個人ワーク「質問を考える」（20分）

ストレングス視点やブラッドショウによるニーズの4分類について説明し、資料 A、B の下部を参考にしながら、フィールドワークの際に確認したい事柄について、質問を考える。

進行⑩グループワーク「質問を考える」（20分）

グループごとにファシリテーター（進行役）とタイムキーパーを決め、グループのメンバーが個人ワークでそれぞれ考えた質問を共有する。共有した質問を参考に、グループとしての質問をそれぞれのグループで考える。

(3) フィールドワークとサービス開発演習の準備—後半—

進行⑪出席確認、前回の振り返り（10分）

進行⑫グループ発表 (30分)

前の時限で考えたグループの質問をその背景や理由を交えながら発表してもらう。

進行⑬グループワーク「質問の再考」(20分)

各グループの発表を踏まえてグループの質問を考え直してもらい、グループとしての質問を確定する。また、誰がどの質問をするかなど大まかな役割分担や優先順位を決めておいてもらう。

進行⑭フィールドワークの行程確認、心構え (20分)

安全かつ円滑にフィールドワークを行うため、次のことを確認する。

- ・集合時間
- ・フィールドワーク先への交通手段を含めた移動方法
- ・フィールドワーク先での過ごし方
- ・守秘義務
- ・緊急時の連絡方法 など

進行⑮フィールドワークにあたっての質疑応答 (10分)

(4) フィールドワーク—前半—

進行⑯集合、出席確認、前回の振り返り (10分)

進行⑰移動 (30分)

進行⑱挨拶、自己紹介、説明 (20分)

フィールドワーク先の担当者から挨拶、自己紹介の後、説明を受ける。

進行⑲活動参加 (30分)

(5) フィールドワーク—後半—

進行⑳活動参加 (10分)

進行㉑質疑応答、意見交換 (20分)

フィールドワーク先の団体の代表者などに、受講生たちが自分たちで作ってきた質問や活動参加した気づきや疑問について答えてもらう。

進行㉒挨拶、フィールドワーク終了 (10分)

フィールドワーク先に御礼の挨拶をし、受講生たちにフィールドワークの終了を伝え、フィールドワークで知りえた個人情報の秘密保持について注意喚起する。

進行㉓受講コメント用紙の記入後、移動 (50分)

自由記述・記名形式の受講コメント用紙にフィールドワークで得た気づきについて、コメントを記入してもらう。

【3日目】

(6) サービス開発演習—前半—

進行㉔挨拶、出席確認、アイスブレイク、当日の演習の流れについて説明、前回の振り返り (20分)

進行㉕グループワーク「それぞれの活動の特徴(特長)をとらえる」(30分)

資料Dを用いてグループごとに前日のフィールドワークのまとめをして

もらう。

進行②⑥グループ発表 (25分)

進行②⑦個人ワーク「3つの宝」(15分)

資料Eを用いて「個人ワーク+グループワーク『3つの宝』」の進め方について説明し、個人ワークを行ってもらう。

(7) サービス開発演習—後半—

進行②⑧出席確認、前回の振り返り (10分)

進行②⑨グループワーク「3つの宝」(30分)

- ・個人ワークの作業結果をグループ内で見せ合いながら発表し、受講生同士で互いに質問をしながら共有する。
- ・今回のフィールドワークを通して把握した情報(地域のニーズと状況、活動の現状、周辺の社会資源など)と、グループメンバーの「好きなこと」、「得意なこと」、「やりたいこと」を組み合わせることで事業や活動を企画する。
- ・企画したものに事業名なども考えながら、A4用紙に整理する。

進行②⑩グループ発表、質疑応答 (30分)

グループごとに企画した事業について発表し、他のグループの受講生は質問やコメントをする。

進行②⑪振り返り、まとめ (5分)

進行②⑫受講コメント用紙の記入 (15分)

自由記述・記名形式の受講コメント用紙に得た気づきについて、コメントを記入してもらう。

### 3 調査データの収集と分析

作成した演習プログラムによる学習効果を検証するため、受講生には2日目のフィールドワーク終了後と3日目のサービス開発演習の終了後に受講コメント用紙にその日一番の学びについて自由記述をしてもらう。

その記述内容についてKJ法を参考にしながら図解化して分析し、学生たちが演習プログラム受講によってどのような影響を受けたのかについて考察した。分析については、3年度分すべてのデータが揃った平成28年1月から開始し、次の手順①から③のとおり筆者が行った。

手順①2日目と3日目の2日分の受講コメント用紙ごとにすべての記述データを一文ずつに分け、カード化する。

手順②カードをグループ化し、グループに表題をつける。

手順③グループ間の関係が明らかになるような配置を行う。

### 4 倫理的配慮

本研究は明星大学研究倫理審査委員会において研究倫理審査を受けている。(明星大学研究倫理委員会 受付番号 H28-017)

具体的な倫理的配慮としては、フィールドワークを実施した小地域福祉活動団体の

代表者に本研究の目的と趣旨について口頭で説明し了解を得た。また、本稿では筆者が団体を特定できない形式にしている。

次に調査対象となる学生には、受講コメント用紙配布時に研究目的を口頭で説明し、記名式であるが試験ではないことを伝え、協力を依頼した。

また、演習を通じて学生たちが作成した企画案は、フィールドワーク先の小地域福祉活動団体に演習の成果物としてフィードバックすると共に、本研究で検証することを口頭で説明し、試験ではないことを伝えた上で提供協力を依頼した。

なお、全ての記述データは本研究のみに使用し、筆者により管理されている。

### Ⅲ. 結果 (Results)

前述の手続きによって得られた2日目と3日目の受講コメント用紙で得られたコメントについては、平成25年度は2日目が出席者全員17人中16人、3日目が出席者全員16人中14人、平成26年度は2日目が出席者全員19人中19人、3日目が出席者全員19人中18人、平成27年度は2日目が出席者全員18人中18人、3日目が出席者全員19人中11人であり、表2の通りである。

表2 受講コメント用紙の提出状況

年度	2日目		3日目	
	出席者数	提出数	出席者数	提出数
25年度	17	16	16	14
26年度	19	19	19	18
27年度	18	18	19	11

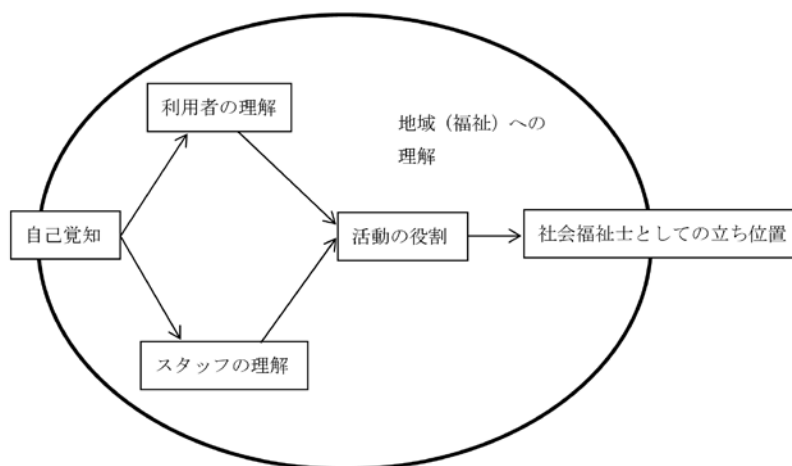


図1「演習2日目の受講コメントの相互関係」



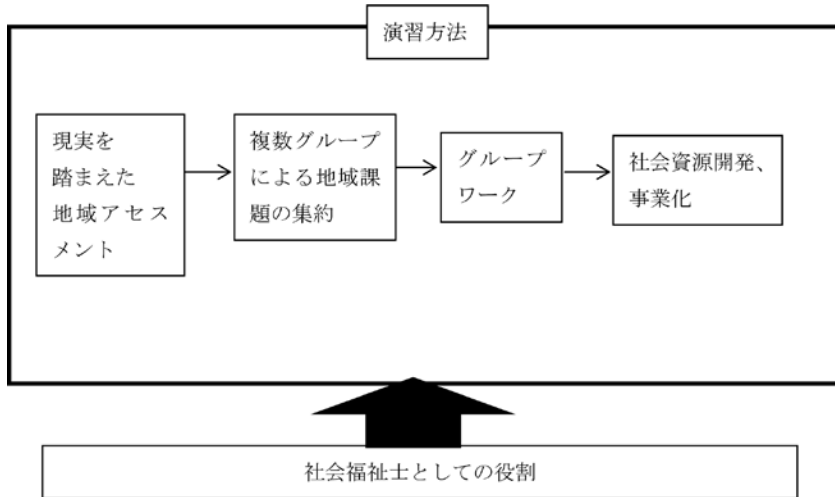


図2「演習3日目の受講コメントの関係」

2日目と3日目の受講コメント用紙への記述内容から分析手順に従って得られた結果についてそれぞれ整理する。そして、カテゴリーごとに抽出された項目を図1および図2で示して、各カテゴリーについて説明する。

## 1 2日目

記述内容より291枚のカードが得られ、次の5つのカテゴリーにまとめることができた。

### (1) 自己覚知

受講生の多くがサロンを含む小地域福祉活動現場を「訪ねるのは初めて」であり、「緊張や不安」、「想像のできなさ」を感じると共に、普段「高齢者と接する機会が少ない」ことを自覚していた。一方、高齢者施設などに訪問した経験がある受講生は「新鮮さ」を感じており、どちらも未知の体験をしていたことが分かった。

また、「最初利用者との会話が弾まなかった」、「利用者やスタッフの話から温かい気持ちになった」、「スタッフからの話で初めて知るようなこともあった」、「私も高齢者と話してみても、とても元気でこっまで元気になった」などフィールドワーク中の利用者やスタッフとの交流の中でも受講生は変化を体験している。

全体的には、「また来たい」と感じている受講生も多く、今回の経験に良い印象を持ったことが分かった。

### (2) 利用者の理解

今回のサロンを利用している人たちは、「一人暮らし高齢者」、「家族同居の高齢者」、「60～90代の人たち」、「月に200～300人が利用している」ということを知り、その利用している人たちが「買い物帰りやカフェのような感覚で利用している」ことや「元気に過ごしている」、「お茶やおしゃべりを楽しんでいる」という実態を知ったこ

とが分かった。

これらの利用している人たちは、「利用者から孫やひ孫の話、戦時中の話を聞き、みんなに生きてきた背景があると思った」、「昔は窓を開ければ子どもたちの声がした。子どもが自立すると親同士の付き合いなくなると聞いた」というこれまでの人生を歩んできた人たちであることも知り、受講生が「一日も外にも出ないと一言も言葉を発することがないという人もいた」という経験をした人に出会ったことも分かった。

一方、「男性が少ない」、「最初入るのに戸惑った」利用者もいた、「来られていない人も多い」などの課題に気づいた受講生もいた。

利用者からは「サロンがあってよかった」、「つながりが増えて楽しい」、「ホッとする温かい場所」、「週に3～5回も来ている」というサロンへの評価を聞いていた。

### (3) スタッフの理解

「スタッフも明るくて楽しい方ばかり」、「スタッフも楽しみにしている」、「80代のスタッフもいる」というスタッフの様子や、「初めは人がなかなか集まらなかったが、オープンカフェを開いて地域の方達にサロンの存在を知ってもらい、少しずつ利用者を増やした」、「空き家利用やNPO法人格の取得、助成金の獲得などいろいろ工夫した」という運営上の苦労話も受講生は聞いていた。

フィールドワーク中に、「コーヒーが来なくて怒っていた男の人がいた。スタッフの気配りの大変さを感じた」、「コミュニケーションを取ろうとするスタッフに助けられた。」という経験もしており、そこには、「この場所に来るとホッとする、安心できることが大切」というスタッフの活動への姿勢を伺い知ることができ、「雰囲気の高さを感じるという理由がスタッフにも分からない」ながらも、「スタッフの存在の大切さを感じた」ことが分かる。

### (4) 活動の役割

それぞれのサロンには、「デイサービスのようなところをイメージしていたが、とてもラフな感じで来ている人たちが自由に楽しんでいた」、「利用者が居場所があって幸せと言っていた」という、来ている人たちそれぞれの居場所としての役割や、「一度来てくれた人をまた次も来てもらえるようにつなげることも目指していた」、「利用者がコミュニケーションを取るいい機会になると言っていた」というつながりづくりの役割を持っていたことが分かる。

また、つながりづくりの役割は高齢者同士だけではなく、「サロンに地域の（特別支援学校の）中学生が来てくれたり、小学校の児童が描いた絵を貼ったり、そうしたところでも地域とのかかわりを持っている」という地域とのつながりづくりの役割もあることを掴んでいた。

それ以外の役割として、「サロンができて地域住民のつながりが強くなった。一人暮らし高齢者の見守り」という見守りや孤独死防止の役割や「一人暮らしで生活が困っている人がいたら、ボランティアで手伝いに行く活動もある」生活支援の役割、「80代のスタッフいて、仕事を生きがいにしていた」という社会的役割をつくる役割、「歌

の会やゲートボールなど、サロンを通じての活動で楽しみながら健康に過ごしていた」という健康づくりの役割まで広く捉えられていたことが分かる。

#### (5) 社会福祉士の役割

数は少なかったが、「将来、子ども福祉の分野で働きたいが、サロンはそこにも接点があると感じた」、「サロン周辺のバリアフリー化を働きかける」、「サロン代表者を通じて児童と高齢者をつなぐことができたら面白いと思った」など社会福祉士としての役割を考えていた受講生もいた。

また、「サロンの存在を教えられた」、「スタッフから話を聞いて、初めて知るようなこともたくさんあったためになった」、「スタッフの話は法律が絡んでいる内容で難しかった」などいわゆる“地域住民が地域福祉の先生”という支援者と被支援者という単純な関係ではない面を経験した受講生もあり、「感謝とどちらがSWかわからなくなった」。

「仕事ではなく人として介護や介助をしてもらいたい」、「市全体に対する(サロンの)設置数の少なさ、立地による利用のしやすさ、三世代交流の機会が少ないことが課題と聞いた」という地域で日々暮らす生活者ならではの話を聞いた受講生もいた。

## 2 3日目

記述内容より107枚のカードが得られ、次の6つのカテゴリーにまとめることができた。

#### (1) 現実を踏まえた地域アセスメント

「サロンを見たことで地域の人は何のために何を欲しているかが垣間見えた気がする」という実感を受講生は持ち、「サロンを訪問し、利用者の方や代表者の方に話を聞いていたので、サロンのあり方や地域のあり方、課題などを考えることができた」ことが分かった。

「サロンで利用者の声や設立者の声も聞けて、リアルを聞くことができました」、「サロンで高齢者の生の声を聞いたことで、自分なりに新しい考えや意見が浮かんできた」という現実を踏まえた地域アセスメントを受講生はそれぞれ取り組んでいた。

#### (2) 複数グループによる地域課題の集約

少数ではあるが、「他の班の内容を聞くことで、その地域のニーズについて改めて考えることができたので、とても充実した授業だったと思います」、「事例を通して自分の考えを発表し、みんなとシェアして、人の話を聞き、まとめて、とてもためになる授業でした」という他のグループの発表を通じて、自身が把握した地域課題との集約を行っていた。

#### (3) グループワーク

「自分たちの好きなこと、得意なこと、やりたいことから企画を考えていったが、意外と意見が集まれば、たくさんの良いアイデアが生まれていた」、「グループワー

クではいろいろな人の考えや対応の仕方を見ることができて、その人によって考えていることや思うことは違うのだと知ることができておもしろかった」など、受講生がグループワークという作業方法について再評価していたことが分かった。これは、「グループワークも苦手だったけど、前よりも自分の意見を言えるようになって良かった」という受講生自身の成長も含めてのことである。

また、「相手と一緒に解決しようとする姿勢が必要だと思った」というソーシャルワークに必要な姿勢をグループワーク中で見出していた受講生もいた。

#### (4) 社会資源開発、事業化

「こんな計画が実際にあったら楽しいだろうという案がいくつもあった」、「孤立した住民を社会参加させるためにはいろいろな方法があるということ学んだ」など、事業を組み立てていく工程で複数の企画案が考えられていた。

「事業を考えるのが楽しかった」、「実際に企画を実現できるかは分からないけど、考えてみて、サロンに提案してみても良いと思いました」という成果物ができる喜びを感じる面と、「楽しいことを考えたり、たくさんの人を集めるだけでなく、場所や予算を考慮するのは難しかったです」、「この起業案が通ってほしいがために、様々な知恵を振り絞って良い案にするのはとても大変なことでした」という生みの苦しみを感じる面と、受講生が両方を体験していたことが分かった。

#### (5) 社会福祉士としての役割

受講生が「いろいろな人のニーズを考えながら1つずつ解決していくことは難しいけど、それと同時にすごくやりがいのあることだと感じました」、「ソーシャルワークでは、ソーシャルワーカーが主体ではなく、当事者、地域住民、環境、福祉に関わるすべての人の相互の関係性を知り、話し合いながら行っていくことが必要なのだと実感した」、「ソーシャルワーカーには人をつなぐという役割があって、地域と問題がある住民をむすぶということも必要だと知った」というコミュニティソーシャルワークの視点を得ていたことが分かった。

また、そのために必要な「自分の周りの人に目を向けてみる、自分が知らない地域を知るということが大切だと感じた」、「前よりさまざまな角度や見方で支援や対策を考えることができたと思いました」という気づきも得ていた一方で、「ソーシャルワーカーの役割やどのような視点に気をつけるかなど、もっと知りたかった」といった消化不良を感じていた受講生もいた。

演習の全工程に参加したことで、「人と共感して、人の気持ちになって考えることを練習して、将来人の相談を受け、解決できるソーシャルワーカーになりたいと思った」、「自分がソーシャルワーカーの立場になった場合の対応を考えていくことができてよかった」というソーシャルワークの一連の流れを実感できたことも分かった。

#### (6) 演習方法

「この方法を使う発想がなかったので、新鮮だった」というサービス開発演習につ

いて、「事業を企画しようというワークが面白かった」、「3日間で一番おもしろいグループワークだった」、「今までの授業の中で、一番と言っていいほど、起業案を考えるとというのはおもしろかったです」、「実践的な内容が多く、普段の授業よりも多くのことを得た気がします」という正の評価と、「正直苦手な分野で疲れた」という負の評価の両方があった。

なかには、「福祉を学ぶにあたってとても大切な地域を知ることができました」、「社協に実習に行きたい気持ちが強くなった」という地域や地域支援に関心を持った受講生がいたことが分かった。

### 3 サービス開発演習で作成された企画案

最後に、各年度の受講生のグループがサービス開発演習で作成した企画案は、事業タイトル、主な内容、捉えた地域ニーズと併せて次の表3のようになった。

表3 サービス開発演習で作成した企画案

25年度	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
事業タイトル	開け! みんなでA地域の心を	スポーツバー～みんなの居場所～	わん・コインスウィーツ	うたおう! 懐メロ
主な内容	常設型サロンの入口で小動物を飼ったり、ガラス張りの中が見えやすいデザインにする。また、利用している高齢者に協力してもらい、近隣の小学校などで昔遊びによる異世代交流を行う。	常設型サロンをその日だけスポーツバー形式で運営し、男性が来やすい場所にする。夜遅い時間まで開室し、一人になれるスペースも用意する。スタッフには高齢者も若者も入る。	一人暮らし高齢者を中心にして、地域住民や学生スタッフと一緒にお菓子や簡単な料理を作って一緒に食べて交流する。1回あたりの会費がワンコイン(500円)。	大学に近隣の高齢者など地域住民を招き、学生の吹奏楽団による生演奏で懐メロを歌う。終了後、お茶を飲みながら交流を深める。
捉えた地域ニーズ	地域住民にもっとサロンに来てもらいたい。	若い人、男の人の参加を増やしたい。	一人暮らし高齢者に、人のために料理する喜びを再度体験してもらいたい。	減少している若い世代との交流。
26年度	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
事業タイトル	冬の日	ミニコンサート	スポーツ大会	プチ旅行
主な内容	日中、雪かきをした後に、みんなで鍋料理(きりたんぼ鍋など)を囲って食べて互いを労う。	自分が演奏できる楽器を持ち寄り、演奏。楽器のない人はハンドフルートなどにチャレンジ。	ゴルフ、野球、サッカー、卓球、グラウンドゴルフなどを若若男女混合チームで行う。	学生たちが迎えに行き、登山、景色、食事、温泉を楽しむドア・トゥ・ドアの日帰り旅行。
捉えた地域ニーズ	地域の高齢化が進み、雪かきが大変だった。	多世代の共同作業が経験できる場。	介護予防の場へ参加していない人がいる。	旅行の機会が少なくなっている高齢者がいる。
27年度	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
事業タイトル	エクササイズ&リフレッシュ	TGGC(東京じいちゃんガールズコレクション)	お料理コンテスト	サロン×コンパ
主な内容	学生と一緒に音楽を聞きながら身体を動かし、森林浴をした後に、温泉に入って親睦を深める。	高齢者と学生が一緒にステージに出演するファッションショーを開催する。	高齢者と学生と一緒に料理を作って食べることで、食文化の継承をしながら交流を図る。	常設型サロンの会場を使って、学生が普段行うコンパを開催して高齢者との交流をはかる。

捉えた地域ニーズ	介護予防活動に参加する人としていない人で差が出ている。	男性をはじめ、誰もが主役となれる場が求められている。	高齢者の社会的な役割をつくる。	若い世代との交流。
----------	-----------------------------	----------------------------	-----------------	-----------

※学生たちの企画の意図をそのままお伝えする都合上、不適切な表現についてはご容赦いただきたい。

## IV. 考察 (Discussion)

### 1 2日目の演習プログラムの影響

「1 自己覚知」での分析の通り、学生たちは初めて小地域福祉活動の実践に接した者が多かったが、「私も高齢者と話してみても、とても元気でこっちまで元気になった。」「利用者やスタッフの話から温かい気持ちになった」という記述が代表するように、サロンの利用者やスタッフに受容され、交流する中で自身の変化を実感している。この変化は言ってみれば、利用者も含めた地域住民による学生たちの精神面へのサポートによるものであり、社会学者のハウス (House, J.S.) の4つのソーシャルサポートに当てはめれば、これは情緒的サポートと呼べるだろう。

これ以外にも、サロンのスタッフは学生たちがスムーズに交流に入れるよう事前に座る席を用意しておいてくれており (手段的サポート)、交流が始まってからは利用者と共に学生たちの話や考えを聞いて一緒に考えてくれ (評価的サポート)、サロンの活動のこと、地域のこと、過去や将来などについて役立つアドバイスをくれた (情報的サポート) ということが分かる。つまり、学生たちは自分自身の実体験を通して、サロンに4つのソーシャルサポートがあることを知ったことになる。

「2 利用者の理解」にあった「サロンがあってよかった」、「ホッとする温かい場所」という利用者の評価がこれを裏付けているのではないだろうか。

また、「2 利用者の理解」と「3 スタッフの理解」なくしては、「4 活動の役割」を理解することは難しかったであろう。「高齢者が多い」という漠然としたイメージがフィールドワークを経て、それぞれのサロン利用者には「一人暮らし高齢者」や「家族同居の高齢者」もいて、「月に200～300人くらいの人」が「買い物帰りやカフェのような感覚で利用している」というより具体的な利用者像にまず入れ替わった。さらにその利用者たちはそれぞれ「みんなに生きてきた背景がある」ことを知り、「昔は窓を開ければ子どもたちの声がした。」という地域の歴史と共に生きてきたことも理解したのが分かる。

一方、「3 スタッフの理解」の分析からは、サロンが地域の交流の場になれるかどうかが決まる上でスタッフが重要な役割を果たしており、「この場所に来るとホッとできる、安心できることが大切」、「いろいろ工夫した」というスタッフのサロン活動に対する様々な姿勢を捉えていた。「スタッフも楽しみにしている」という言葉は、スタッフのサロンや地域への愛着があるからこそであるということに学生たちも気づいていたがゆえに、「スタッフの存在の大切さを感じた」のではないだろうか。

暮らしてきた地域に愛着を持っている利用者とスタッフの関係があって、「4 活動の役割」の分析で得られたような「居場所」と「つながりづくり」に止まらない幅広い役割をサロンが担うようになったのであるが、そこでの「5 社会福祉士の役割」

は何であるのか。そこに気づいた学生がいたかどうかは、今回の記述内容からは残念ながら把握できなかった。

ただ、「5 社会福祉士の役割」にカテゴリズされた記述内容で、「将来、子ども福祉の分野で働きたいが、サロンはそこにも接点があると感じた」などの一部のコメントからは、図1にあるように、2日目の演習プログラムを通じて、学生たちは自身の変化を実感しながらサロン利用者とスタッフの理解を進めており、サロン活動とそこから派生した活動について知っていくことで、地域で暮らす人を支えるインフォーマルなサポートとしての小地域福祉活動に対する社会福祉士としての役割を少しずつ意識していったことが伺うことができる。

## 2 3日目の演習プログラムの影響

3年度の学生たちの各グループで作成された最終的な事業企画案を見ていくと、学生たち自身に関わるという制約上、イベント型のものがほとんどであり、またその案は机上の空論の域を脱してはいないが、捉えたニーズの選択とニーズを充足する事業の企画にユニークな視点や発想を見ることができる。

例えば、25年度のBグループと27年度のBグループは、高齢男性の社会参加を促したいという点では捉えたニーズに共通点は見られるが、そこからさらに焦点を当てたのが高齢男性の「ペースや関心事」なのか「役割」なのかという違いがある。また、企画案を作成したグループメンバーの関心事や持っている資源の違いから、最終的な事業の方向性が「サロンを夜もオープンしているスポーツバー化する」という案と「高齢男性が女子学生とランウェイを歩くファッションショー」という案に大きな違いを見せている。

平野 (2016: 10) がいう「地域福祉の地域性」、つまり地域福祉は「地域住民によって担われる要素があるため、地域外から資源を移入させることができず、」各地域で特有の地域性を現れるという片鱗がここでも現れたのではないだろうか。

いずれにしても、学生たちが2日目のフィールドワークで得た情報を3日目にグループで課題集約していく中で、何をニーズと捉えたのか、また地域にある社会資源と自分たちの持つ社会資源の中から何を持ち寄ったかによる違いが3年度計12グループの企画案の違いとなっている。

この企画案に至るまでに、学生たちは「1 現実を踏まえた地域アセスメント」、 「2 複数グループによる課題集約」、 「3 グループワーク」、 「4 資源開発、事業化・制度化」という各プロセスの影響を受けていることが記述内容から見て取ることができる。「1 現実を踏まえた地域アセスメント」では、文字通り2日目のフィールドワークにおいてサロン利用者とスタッフの影響を多分に受けながら生の声や垣間見たニーズを持ち帰り、「2 複数グループによる課題集約」から「4 資源開発、事業化・制度化」は教室で学生たちと筆者だけの空間となるが、そこでも同じグループのメンバーや他のグループの影響を受けながら「5 社会福祉士としての役割」を学んでいたのである。

この「課題明示→個人思考→集団思考」の流れを持ち、「グループの教育的な活用で

あり、グループの学習目的を達成するために、学生が自分と他者を最大限に高めることに協同して学習する」(Johnson et al. 1991=2001) 学びのプロセスを Johnsonら(1991)は協同学習として提唱しており、アクティブラーニングの代表的な方法となっている。

## V. 結論

今回開発した演習プログラムには前述のとおり、3つの目標があった。学生たちが2日目と3日目に記入した受講コメントの記述内容の分析を通して、3つの目標に沿って整理すると演習プログラムが次のような影響を与えていたといえる。

### ①インフォーマルなサポートの実態を知ること

フィールドワークを行ったことで、インフォーマルなサポートの実態についてサロン利用者の直接の話を聞けて知っただけでなく、学生たち自身の実感として理解できたことが見て取れる。

それは例えば、特に情緒的サポートを中心とした社会学者のハウス (House, J. S.) が指摘した人間として生きていくために必要な四つ (情緒的サポート、手段的サポート、評価的サポート、情動的サポート) のソーシャルサポートネットワークが得られていることであったり、また、利用している高齢者から聞いた話や気持ちを取り、本来の居場所やつながりづくりの役割以外にも、孤独死防止のための見守りや生活支援、健康づくりなどの活動にも幅を広げていることや、高齢者だけでなく近隣の小学校児童や特別支援学校生徒なども来ていることから、地域の交流の拠点として様々な可能性を持っていることも知った。

### ②社会福祉士の役割を理解すること

地域で暮らす一人一人を支えていくためには、当事者本人を中心にその本人の理解と共に、周りの関係者との関係性も把握し、関係者とも協力しながら適切な社会資源につなげていくこと、また、その社会資源が存在しない場合は同様に本人や関係者と協力しながら創り出していく役割があることを理解した。

一方で、地域住民との関係性は単純ではなく、“地域住民が地域福祉の先生”でもあることを実感していた。

### ③地域福祉における社会資源開発の方法を知ること

地域福祉における社会資源開発には方法があり、まず事前情報を調べた上で現地へ赴きその地域で暮らす地域住民から直接生の声を聴くことが地域調査には有効であること。次の段階として地域課題の集約があり、地域調査で把握したニーズが何であるか明らかにした上でグループのメンバーと事業を考えていくことで、良いアイデアが生まれたことを実感していた。

原田 (2016: iii) は、「地域福祉の学び方は一様ではない。教える側と教えられる側が一方向に固定されるものでもなく、地域福祉とは何かを学び合う関係性が大切であるとも言われる」とし、また「専門家は謙虚に地域に学ぶことが大切である」という。であるならば、本研究で開発した演習プログラムにおいて参加した学生たちが学んだ



ことは地域福祉の学びそのものであったといえる。

もちろん、コミュニティソーシャルワークの価値を知った上でその機能を高めるためには、さらなる知識習得や実践経験が必要なことは言うまでもなく、実務経験のない学部生を対象とした3日間15時限の演習だけでは充分ではない。

また、フィールドワーク先の小地域福祉活動団体の活動タイプにバリエーションを持たせることや、サービス開発演習の際に地域の方達に参加してもらうなど、まだこの演習方法に発展・改良の余地があることは疑いない。

ただ、そのような中で、「地域福祉の広さ、深さを学習するために、学ぶ道筋やモデルを示し、それに基づいて創意工夫していくことが、質的な底上げをしていくこと」(原田2016: iii)になるのであり、本研究の3年度の結果を踏まえて、筆者はコミュニティソーシャルワーク機能を高める具体的な相談援助演習の方法の一つとしてこの演習方法を提案したい。

地域に根差している大学としての特長を十分に活かし、地域の様々な生きた社会資源とつながっていくことこそが今後も地域社会に貢献できるソーシャルワーカーの養成に寄与できる方法であると確信している。

## 謝辞 (Acknowledgements)

本研究を進めるにあたり、貴重なお時間を割いて丁寧なフィールドワークの受入をしてくださったそれぞれのサロンの利用者とスタッフのみなさんに深く感謝申し上げます。

また、本研究を支えてくださった明星大学人文学部福祉実践学科の馬場康彦先生と同大学実習指導室の中條共子先生に感謝いたします。そして、最後に調査への協力に快く応じ、私に大いなる喜びと勇気、そして気づきを与えてくれた学生のみなさんに感謝いたします。

## 引用文献および参考文献 (References)

### (1) 引用文献

- 福山和女 (2009) 「第4章 相談援助演習概論」社団法人日本社会福祉士養成校協会編集『相談援助演習教員テキスト』中央法規出版、75
- 平野隆之 (2016) 「第1章2 『地域福祉の理論と方法』の教材活用の視点」上野谷加代子・原田正樹編『地域福祉の学びをデザインする』有斐閣、10
- Johnson, D. W., R. T. Johnson & K. A. Smith, 1991, Active Learning; Cooperation in the College Classroom, Interaction Book Company (関田一彦監訳、2001『学生参加型の大学授業-協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部)
- 小松理佐子 (2016) 「第1章3 地域福祉の教育の方法」上野谷加代子・原田正樹編『地域福祉の学びをデザインする』有斐閣、17-18
- 内閣府 経済財政諮問会議 (2016) 「経済財政運営と改革の基本方針2016～600兆円経済への道筋～」([http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/2016/2016\\_basicpolicies\\_ja.pdf](http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/2016/2016_basicpolicies_ja.pdf), 2016.11.3)
- 大橋謙策 (2015) 「第1章第2節 機能」日本地域福祉研究所監修/中島修・菱沼幹男共編『コミュニティソーシャルワークの理論と実践』中央法規出版、27-37
- 上野谷加代子 (2016) 「刊行にあたって」上野谷加代子・原田正樹編『地域福祉の学びをデザインする』有斐閣、ii

### (2) 参考文献

Bill Lee(2005)『実践コミュニティワーク』武田信子・五味幸子訳,学文社  
中川千恵美・峯本佳世子・大野まどか編(2010)『事例中心で学ぶ相談援助演習』株式会社みらい  
山田宜廣(2011)『住民主導の地域福祉行動』筒井書房

資料A

A. ●●●ふれあいサロン（お話を聞く人）代表 ■■■■さん

- ・市の南寄りに位置し、河川、私鉄、街道、丘陵地帯が東西にほぼ平行に通る地域に当たる。
- ・街道沿いには大型の店舗や商店、マンションが建ち並び、私鉄沿線や丘陵地帯には戸建ての住宅が多く、用水や丘陵公園がある自然環境豊かな地区。
- ・地区内の自治会では、市内でも積極的な防災活動をする自治会がある一方で、自治会加入率が低下したため活動がままならないという声が出ている自治会もある。
- ・18●●年に村としてE県F郡に編入。18●●年にG県H郡にI村として編入。

[人口]●●●●●人

[主な施設]大学学生寮1、公立高校1、公立中学校1、公立小学校1、児童館1、私立保育園1、障害者グループホーム3、障害者通所施設3(2法人)、小規模多機能ホーム1など

- ・団体設立の背景を訊く質問
- ・活動が始まってからの地域や人の変化を訊く質問
- ・現在の活動上の課題について訊く質問
- ・今後の地域の将来像やこれから活動で取り組んでみたいことを訊く質問

## 資料 B

B. ■■■ふれあいサロン (お話を聞く人) ふれあい協議会副会長 ▲▲▲▲さん

・■■■団地は、日本住宅公団(現 UR 都市機構)が 19●●年に C 市と D 市の市境に建設。5 階建ての低層と 11 階建ての高層住宅の 2400 戸が建てられた。山の起伏を利用した斬新なデザインと敷地内に、学校、病院など総合施設が整えられた当時の新感覚の住宅。

・丘陵地帯の頂上部分に位置し、北に特別支援学校、障害者入所施設 2、都営団地があり、東に戸建て住宅地域がある。

・自治会活動が盛んで、夏には大規模なお祭りがある。

[人口] ●●●●人 ※■■■地域全体で。

[主な施設]大学 3、市立中学校 1、市立小学校 1、特別支援学校 1、児童館 1、子育てひろば 1、市立保育園 1、私立幼稚園 2、障害者入所施設 2、障害者就労移行支援事業所 1、特別養護老人ホーム 1、小規模多機能ホーム 1 など

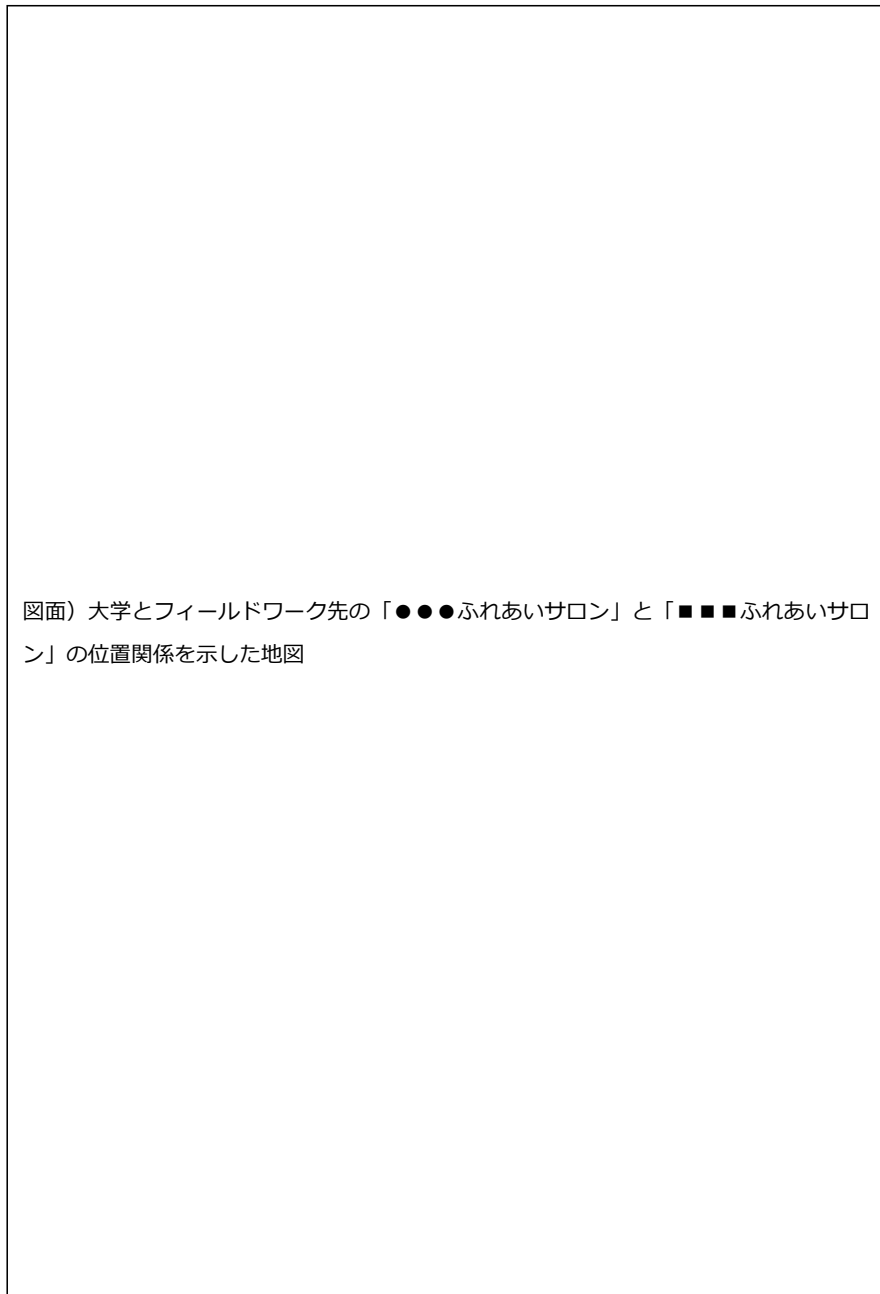
・団体設立の背景を訊く質問

・活動が始まってからの地域や人の変化を訊く質問

・現在の活動上の課題について訊く質問

・今後の地域の将来像やこれから活動で取り組んでみたいことを訊く質問

資料 C



**資料 D**

**グループワーク4「それぞれの活動の特徴（特長）をとらえる」**

グループごとにそれぞれのフィールドワーク先の活動で見たこと、聞いたこと、やったこと、感じたことをまとめて発表しましょう。

・利用者に関して

・スタッフに関して

・活動に関して

・地域に関して

・受け止めたニーズ

・その他

**資料 E**

**個人ワーク+グループワーク5「3つの宝」**

- ①自分が「好きなこと」、「得意なこと」、「やりたいこと」について、思いっただけ付箋 1 枚に 1 つ書いて A4 用紙 1 枚に分類する。
- ②書き出して分類したものをグループのメンバーで共有し、あらゆる組み合わせを考えながら事業（活動）を企画する。

**資料 F**

**グループワーク 6「それぞれの団体へのプラン作り」**

「3つの宝」を活かして、事業を企画しましょう。「コミュニティワーカー」役をグループから2人決めて、「カードワーク」を使って双方のグループで進行します。

**A. ●●●地域**

・解決したい課題

・狙っている効果

・事業

**B. ■■■地域**

・解決したい課題

・狙っている効果

・事業